

「今日の説教、聴き手のために」 2014/2/2 明治学院教会 (327)

(このプリントは、説教ごとに作っているものです) 牧師 岩井健作

『種は実を結ぶ』 マルコ福音書4章1節-9節。

1、今日は、有名なイエスの「種蒔きの譬え話」からメッセージを聴きとります。

「譬え」(*)は、彼方(神)の真理を、こちら(人間)の経験で体得してもらう伝達の方法です。「種蒔き」の経験がない人には、頭で理解できたとしても、本当に、体では分かってもらえないでしょう。イエスの周りの群衆(オウロス)は、種蒔きの経験のある人達でした。裏を返せば、この譬えはエルサレムの神殿(経済)で生活している学者や祭司には「理解できますか」という批判を含んでいます。私たちが「種蒔き」の経験をしていません。だから、自分の生活の場、「生きてゆく課題」に「再解釈」をして、そのメッセージを聴く必要があるでしょう。母親や保育者や教師は子供が育つという経験で。医師は患者が育つという経験で。管理者は従業員が育つという経験で。牧師は信者(教会)は育つという経験で。また、実際、都市消費生活でも、種を蒔く、育てるという経験は小さなことでも大事でしょう。家庭菜園、保育園・幼稚園・学校などでの、花造り、野菜造り、サツマ芋作りなどです。

(*譬えパラボレーは傍ら・並べて(パラ)、置く、投げ込む(ボレオー)の語意。)

2、私にとっては、この譬えは「信仰の原点」でもあります。何故かといえば、青年前期「種蒔き」の生活で育ったからです。系譜をたどれば、それは賀川豊彦にあります。父岩井文男が銀行員をやめて農村伝道に携わったのは賀川先生との出会いでした。農村伝道の苦労は「種蒔き」の苦労と「実を結ぶ(収穫)こと」の喜びそのものでした。「麦作りは」創造の業と恵みの壮大さを、「サツマ芋作り」は社会の矛盾とその変革の課題を私に教えてくれました。私は、あえて農村教会ではなく、日本では都市の歴史を積んできた教会に招かれたことを自分の召命として、幾つかの教会で、56年間、宣教・牧会に取り組んできました。ずーっと抱いていたどん底の課題は、近代日本のキリスト教の「イエス振舞と言葉とは乖離した」教条化・観念化した「体質の改善」の課題でした。しかし、余りにも大きな課題で、実を結ばない経験の連続でした。ここ8年は、「キリスト教主義学校と教会」という課題を与えられました。皆さんと共に歩みました。最後は下村牧師と共同して「新しい教会像」を提示して見ました。しかし道遥かな思いです。

3、今日のテキストの譬えで言えば「道端に落ちて、鳥が来て食べてしまった。・石だらけの土の少ない所に落ち・枯れてしまった。茨の中に落ちた・実を結ばなかった。」(4-7節)というイエスの言葉が重く心に響きます。しかし実を結ばない種(単数形)のあるのは事実です。しかし8節には「また、ほかの種は(複数)・」は実を結んだとあります。「福音の前進」の事実です。「神の国(支配)」の実現の事実です。「また(カイ)」という並行的書き方は、「実を結ばない現実」と「種を実を結ぶ現実」が共に存在していることを示します。他の表現で言えば、「実を結ばない現実」が相対化されているのです。「十字架の死」と共に「復活の命の喜び」が示唆されているとも言えるでしょう。種の実りを信じて、めげずに励みましょう。